

とちゅう、石のお地蔵さまが六つ、からあつとならんで、雪に吹きつけられて立っていました。

「おお、おお、お地蔵さまがた、雪かぶって、さぞ寒かるう」

じさまはそういうと、しょってきましたすげの笠を下ろし、お地蔵様の頭に積もった雪をふり払つてはかぶせ、ふり払つてはかぶせました。じさまは自分のかぶつている笠をぬいで、六つ目のお地蔵さまにかぶせ、

「さあ、これでかんべんしてくだされよ」といつて、帰つていきました。

笠地蔵といえば、雪の情景を思い浮かべますが、こうやつて見ると、実際には雪景色を描写しているわけではありません。

新美南吉「てぶくろを買いに」

『「んぎつね』新美南吉作／岩波少年文庫

さむい冬が北方から、きつねの親子のすんでいる森へもやつてきました。

ある朝、ほらあなから子どものきつねが出ようとしましたが、

「あつ。」とさけんで、眼をおさえながらかあさんぎつねのところへころげてきました。

「かあちゃん、眼になにかさきつた、ぬいてちようだい、早く早く。」といいました。

かあさんぎつねがびっくりして、あわてふためきながら、眼をおさえている子どもの手をおそるおそるとりのけてみましたが、なにもさきつてはいませんでした。かあさんぎつねは、ほらあなたの入り口から外へ出てはじめてわけがわかりました。さく夜のうちに、まつ白な雪がどつさりふつたのです。その雪の上からお腹さまがキラキラとてらしていたので、雪はまぶしいほど反射していました。雪を知らないかたは、あまりつよい反射をうけたので、眼になにかささつたと思つたのでした。

子どものきつねは、あそびにいきました。まわたのようにやわらかい雪の上をかけまわる

と、雪の粉が、しぶきのようなどびちつて、小さいにじがすつとうつるのでした。

するととつぜん、うしろで、

「どたどた、ざーっ」とものすごい音がして、パン粉のようなこな雪が、ふわーっと子ぎつねにおつかぶきつてきました。子ぎつねはびっくりして、雪の中にころがるようにして十メートルもむこうへにげました。なんだろうと思つてふりかえつてみましたが、なにもいませんでした。それは、もみのえだから雪がなだれ落ちたのでした。まだ、えだとえだのあいだから白いきぬ糸のように雪がこぼれでいました。

雪が子ぎつねにとつてどのように見えるのか、感じられるのかを丁寧に描いてありますね。

国境の長いトンネル抜けると雪国であつた。夜の底が白くなつた。信号所に汽車が止つた。向側の座席から娘が立つて来て、島村の前のガラス窓を落した。
娘は窓いっぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さん、駅長さん」

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれていた。

「駅長さん、私です、御機嫌よろしくうござります」

「ああ、葉子さんじやないか。お帰りかい。また寒くなつたよ」

「てぶくろを買いに」のように雪そのものを描写するために書かれているわけではないけれど、作品の基調としての雪の白さと冷たさがさまざまと描かれていますね。